

人権作文

昨年度の阿蘇市人権作文集『かけはし』の作品の中から一部を紹介します。

皆さんもぜひ、家族や身近な人との関係を見つめ直し、人権や差別について話し合う機会を持ちましょう。

じいちゃん、私の心の中で生きています

乙姫小学校 5年(現6年)

坂梨 さかなし 友恵 ともえ

そう式が終わって、じいちゃんをかそう場に運びました。じいちゃんが乗った車は、黒くて後ろが長い車でした。じいちゃんの車には、ばあちゃんが乗って行きました。わたしは、家の車で先にかそう場へ行きました。

じいちゃんがかそう場に着いたら、別の部屋でおきようをあげました。わたしは、おきようのとお母さんの後ろにかくれて泣きました。じいちゃんが家に来てくれていたことを思い出して、じいちゃんが亡くなったことを信じたくありませんでした。じいちゃんの写真を見たり、おきようを聞きたくなかったからお母さんの後ろにかくれました。おきようが終わってから、じいちゃんが入ったひつぎを台に乗せボックスのようなどころに入れました。かそう場の人がスイッチを押しました。わたしは、心の中で(あれを押したら燃えるんだな)と思いました。

かそう場の人が、「別の部屋へ行ってください。」と言いました。

しばらくして、かそう場の人が、「終わりました。こちらへきてください。」と言いました。ボックスから、じいちゃんが乗っていた台が出されました。台の上を見たら、バラバラなじいちゃんの骨がありました。見た瞬間に、わたしは、(何でじいちゃんが亡くならなきゃいけないの)と思いました。(じいちゃんは、病気で薬を飲んだり注射をしたりしていたから、他の人の骨よりバラバラになっていた)と思います。お兄ちゃんは、上を見てハンカチを目に当てていました。二年生のいとこは、おじさんにだきついて泣いていました。かそう場の人が、じいちゃんの骨をくわいて小さくしました。(じいちゃんの骨をつぶして、じいちゃんは天国の楽な所へ行けなくなるのではないか)と思うと見ていてこわくなりました。みんなは、竹のはしでじいちゃんの骨を拾って骨つぼの中に入れました。わたしはお母さんに、「拾いたくない。」と言いました。でも、お母さんは、「拾いなさい。」と言いました。わたしは、じいちゃんの口の骨を、二つつぼの中に入れました。わたしは、本当はじいちゃんの骨をくわいたりしたからつぼに入れたくなかったけど、じいちゃんが

じょうぶつでできないからつぼに入れました。骨を入れ終わってばあちゃんを見たら、ハンカチで目を押さえて泣いていました。わたしはつらいと思っていたけど、ばあちゃんの方がもつとつらいんだなと思いました。下くちびるをぎゅつとかみしめました。それに、じいちゃんが元気な頃にバイクでくだ物やジュースなどを持ってきてくれていたことを思い出しました。わたしは涙がぼろぼろ出るようになりました。でも、わたしが泣いたら、ばあちゃんもつと泣くと思ったのでくちびるをかんで泣きませんでした。

その後、ばあちゃんは骨つぼをもって車に乗って帰りました。わたしもまた、車に乗ってそうぎ場に帰りました。車の中は、しーんとしていました。わたしは、(ばあちゃんの前では泣かない。じいちゃんが悲しむ)と思つて泣きませんでした。そうぎ場からばあちゃんの家に行つて、ばあちゃんの家からわたしの家に帰る車の中で、もうがまんが限界になって、わたしは泣いてしまいました。

平成二十一年度
阿蘇市人権作文集「かけはし」より